

Title	人麻呂の技法：近江荒都歌をめぐって
Author	村田, 正博
Citation	人文研究. 35 卷 3 号, p.127-151.
Issue Date	1983
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人麻呂の技法

——近江荒都歌をめぐって——

村田正博

一、独創的枕詞

柿本人麻呂歌の特色の一つとして、枕詞の多彩と独創とをあげることができる。この点につとに吟味を加えた澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」(『萬葉の作品と時代』)によれば、人麻呂歌(歌集所出歌を含む)に見える枕詞はおよそ百四十種で萬葉集全体の約三分の一にのぼり、そのうち、人麻呂の独創性を認めうるもの——すなわち、人麻呂歌初出の枕詞、および伝来の枕詞に手を加えて新たな用いかたを示した枕詞は、大半を占めることが明らかにされている。この特色を、澤瀉氏は「謡ひ物としての歌謡より文学としての長歌を完成した」人麻呂のいとなみを反映する事実として位置づけられており、その後の人麻呂研究の動向をさきどりしたものと注目される。

人麻呂における枕詞の独創という観点から、軽視することのできない作がある。近江荒都の歌である。

近江の荒れたる都を過ぐる時に柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉たすき敵傍の山の 檣原のひじりの御世ゆ或いは「宮ゆ」といふ 生れましし神のことごと 樛木つがのきのいや継ぎ継ぎに 天の

下知らしめししを或いは「めしける」といふ そらにみつ大和を置きて 青丹よし奈良山を越え或いは「そらみつ大和を置き青丹よし奈良山越えて」といふ いか

人麻呂の技法

さまに思ほしめせか 或いは「思ほし
けめか」といふ あまざかる夷ひなにはあれど 石走いはばしる淡海あふみの国の 楽浪さきなみの天津あまの宮に 天の下知

らしめしけむ 天皇すめらみの神の命みことの 大宮はこと聞けども 大殿はこと言へども 春草の茂く生ひたる 霞たつ

春日の霧れる 或いは「霞たつ春日か霧れる
夏草が繁くなりぬる」といふ ももしきの大宮とて 見れば悲しも 或いは「見ればさ
ぶしも」といふ (萬葉集卷一―二九)

反歌

楽浪の志賀の唐崎さき幸さきくあれど大宮おほみや人の船待ちかねつ (三〇)

楽浪の志賀の一には「比良
の」といふ大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも 一には「逢はむと
思へや」といふ (三一)

この歌は、萬葉集卷一の配列の様態から見て、持統二―三(六八八―九)年の作らしく(萬葉考)、人麻呂の本格的宮廷歌のもっとも初期のものと推定される。

作中の枕詞は、「玉たすき・樛木つがのきの・そらにみつ・青丹よし・あまざかる・石走注1る・霞注2たつ・ももしきの」の八つで、独自の枕詞として「玉たすき・樛木の・そらにみつ・石走る」の四つを数えることができ、人麻呂の工夫のほどを追究する糸口を与えている。といって、伝来の枕詞には生みの苦しみがこめられていないなどと言うつもりは、むしろ、ない。見やすい例として長歌末尾の「ももしきの」についていえば、本来、大宮の堅固で広大なさまをとりたてる賞讃の枕詞であるものを、眼のあたりにする大津の「大宮ところ」に冠し、かつての繁栄を印象づけることよって、かえって荒廢の悲哀を深めている。伝来の枕詞も、なおざりにすることはゆるされない。伝来のものにもこうした工夫の跡が認められることをふまえるとき、独自の枕詞に託された表現意図を追究することは、いっそう重要性を帯びることができよう。

近江荒都歌において、右四つの独自の枕詞には、それぞれ格別の意図がこめられていると認められる。長歌冒頭の「玉たすき」は、ウナグと言いかけつつ「畝傍の山」を導く（『冠辞考』所引 荷田在満説）。と同時に、巫女による神事の実修を連想させることによって「畝傍の山」の聖性をあらわし（林屋辰三郎『中世芸能史の研究』四十四ページ・日本古典文学全集『萬葉集』一）、ひいては、神聖な天皇の系譜を説く文脈をひきたてるはたらきを示している。また、第七句「樛木の」については、つぎのような指摘がある。この枕詞は、類音をもって「いや継ぎ継ぎに」を起こす一方、原文が「樛木乃」と表記されている点を重視すれば、毛詩周南に見える天子讚歌である「南有_二樛木_一、葛藟累_レ之、樂只君子、福履綏_レ之、ニ云々」（樛木）を連想させつつ、歴代天皇が大和で天下を統治されつづけたことへの讚美をあらわしたものと解することができる、と（小島憲之『上代日本文学と中国文学』中）。いずれも、被枕（畝傍の山・いや継ぎ継ぎに）を喚起するにとどまらず、枕詞がはめこまれた文脈に対応し、その文脈を充足させる機能を賦与されていることが知られる。

本稿の見るところ、残る二つの独自の枕詞「そらにみつ」と「石走る」とにも、同様のはたらきを認めることができる。そればかりか、「そらにみつ」と「石走る」は、部分の文脈を充足させるにとどまらず、近江荒都歌全体の構成に関与するべく布置されていると信じられる。以下、このことについて、あたらかぎりの考察をくりひろげてみたい。

一、「そらにみつ」と「石走る」

「そらにみつ」は、近江荒都歌に一例見えるだけで、「そらみつ」のかたちで用いられるのがつねである（記歌謡七二、七三、九八、紀歌謡七五ノ一本、続紀歌謡天平十五年五月五日第一首、萬葉集では卷一一一ほか五例）。一般のかたち「そら

みつ」については、神武紀につきの記事が伝えられている。

饒速日命、天の磐船に乗りて太虚を翔り行きて、この郷を睨りて降りたまふに及至りて、かれ因りて目けて「虚空見つ日本の国」と曰ふ。(三十二年四月)

天つ神の子、饒速日命が「大空よりこの国をよい国だと見て天降った」から「そらみつーやまと」と言うのだとするこの伝説は、語法上に無理があり(萬葉集古義ほか)、いわゆる民間語源の一種で、「そらみつ」の原義を伝えるものではないと判断される。ところが、萬葉人は、語法上の無理にもかかわらず、この枕詞を神武紀に伝えるような意味に理解して用いていたらしいふしがある。

まず、「そらみつ」を訓字表記した例を見ると、「虚見津」(巻一一)「虚見」(巻一一九或云)「虚見通」(巻五―八九四)「虚見都」(巻十九―四二四五、四二六四)「空見津」(巻十三―三三三六)など、いずれもソラには大空を意味する「虚空」の文字をあて、ミには「見」の文字をもちいている。この一定する用字は、萬葉人が「そらみつ」のソラに大空を、ミに見る意を意識していた徴証であり(萬葉集全註釈)、同時代の史書の傳承は、その意識の反映と捉えることができるであろう。

また、大伴家持の作に「あきづ島大和の国を 天雲に磐船浮かべ 艫に舳にま權しじ貫き い漕ぎつつ国見しせて天降りまし掃ひ平らげ 千代重ねいや継ぎ継ぎに 知らし来る天の日継ぎと 神ながら我が大君の 天の下治めたまへば云々」(巻十九―四二五四)という表現が見られる。「磐船」を浮かべて「国見」をし、この大和に「天降」ったというのは、前掲神武紀の傳承とよく符合しており、「虚空見つーやまと」の慣用表現をふまえ展開させたものと考えられる(枕詞燭明抄)。さらに、山上憶良が大唐大使(丹比広成)に贈った「好去好来歌」が「神代より言ひ伝て来らくそらみつ(原文「虚見通」)大和の国は 皇神の厳しき国 言霊の幸はふ国と 語り継ぎ言ひ継がひけり」とうたいおこ

し、航海に関与する神々に加えて、「天地の大御神たち 大和の大国御魂」をもちだして「ひさかたの天のみ空（原文「見虚」）ゆ 天翔り見わたしたまひ」とうたっているのも（巻五―八九四）、冒頭部「そらみつ―大和の国」に対応させてのことかと考えられる。家持のばあい、大空から国見をしつつ天降って来るのは皇室の祖ニギノミコトであり、憶良のばあいは、いずれの神と限定しないかたちでうたっており、その点、饒速日命を主体とする神武紀の伝承との間に相違を見せるけれども、いずれも、仰ぐべき祖神の降臨・照覧にかかわる語として「そらみつ」を意識している点では一致する。思うに、大和の創始にあずかる祖神の天降りにまつわる語として「そらみつ」が認識され、その反映が神武紀や憶良歌・家持歌に見出だされるといのが実情であろう。萬葉人の「そらみつ」理解を投影するものが神武紀の伝承であつたらしいとの推測は、以上の二点にもとづく。

人麻呂が、伝来の枕詞「そらみつ」に手を加えて「そらにみつ」のかたちにしたのは、四音を五音に整えたもので、まず、この点を独創の一つに数えることができる（冠辞考ほか）。この「そらにみつ」について、意味は「そらみつ」と変わらないとする立場がある（萬葉代匠記ほか）。しかし、この立場によると、「そらにみつ」の「に」を「ゆ」と同じとして、見る動作の起点を示すと解さなければならず、また、原文「天尔満」の「満」を「見つ」の借訓表記と考える必要を生じる。

ところが、「――（場所）に見る」と言うときは、「島廻すと磯尔見し花」（巻七―一一七）「住吉に行くといふ道尔昨日見し恋忘れ貝」（巻七―一四九）のように、ある場所に主体とともに存在する対象を見るばあいに限られており、一方、ある場所からそこにはない対象を見るばあいには、「布留山從直に見渡す都にぞ」（巻九―一七八）「海原の八十島の上由妹があたり見む」（巻十五―三六五）のように助詞「ゆ（よ・より）」を用いるのが一般であり、「そらにみつ」を大空より見たの意に解しうる余地はほとんどない。また、原文「満」は、萬葉歌において、充足を意味

するミツ・タル・タタハシを表記するいわゆる正訓字としての用法のほかには、音仮名としてマの表記に用いられるのみで、借訓の用例を見出すことができない。「そらにみつ」を「虚空見つ」と同様に解することは、むつかしいというべきであろう。

一方、橘守部は、近江荒都歌に「天尔満」と表記されているのに着目して、「そらみつ」は「そそりみつ」の約で「山の満足ミチクリで、蒼天ソウラまで聳上ソノリれるを云

うことばであったとし、「蒼天満山ソウラミツヤマ」と「山」に言いかけつつ「大和」を導く枕詞だと説明している（稜威言別・萬葉集檜婦手）。「そらみつ」を「そそりみつ」の約とする点、また、すでにふれたように「そらみつ」については神武紀の伝承のような解が流通していた可能性が認められることを考慮していない点など、疑問が少なくない。しかし、「天尔満」の表記に着目しての説であるだけに、「そらにみつ」の解釈としては、注意をひく。

守部説の疑点を止揚して、澤瀉久孝氏は、「一般にはむしろ神武紀説の行はれてゐた中に、人麻呂のみが、守部の解を解としたと考へられないであらうか」と述べられた（前掲論文）。この立場は、「天尔満」の用字にもかない、用字から推定される「ソラーニーミツ」という語の構成にも無理なく適合する。

いったい、「大和」に対する讚辞としては、「浦安ウラヤスの国・細くはし戈ほこの千足ちだる国・磯輪上しわかみの秀真国ほつ」（神武紀三十一年四月）、あるいは、大和の中核をなす地名をやがて枕詞として冠した「あきづ島大和」（紀歌謡六二、六三、七五、萬葉集卷一一二ほか）「磯城島の大和」（卷十三―三二五四ほか）、また、大和を太陽の出づる国と捉える心情を反映する「日の本の大和」（卷三―三一九）などのほかに、「小楯大和をだて」（記歌謡五九ほか）「たたなづく青垣あまかき 山隠こもれる大和」（記歌謡三一ほか）「青垣の大和」（播磨国風土記美囊郡）「玉牆たまかきの内つ国」（神武紀三十一年四月）など、大和を山に囲まれた聖地として意識したことを示す例が少なくない。この点からも、守部説を止揚した澤瀉説は支持を得ることができる。

「そらみつ」に手を加えて「そらにみつ」としたのは、大和が「山」に囲まれた土地であることを印象づけつつ「大和」を導く枕詞として機能させるためであったと言って、大過はないであろう。ならば、当面の近江荒都歌において、「山」を連想させつつ「大和」を提示したのは、いかなる意図においてであったのか。この点を掘り下げないかぎり、独創の本質を明らかにすることはできない。

案ずるに、「山」を印象づけつつ「大和」を提示したのは、大和を置いて遷都されたさきが、水辺の地「淡海の国の楽浪の天津の宮」であったこととの対照をねらったからではなかったか。この推測にとって見逃がせないのは、「淡海の国」に冠せられた枕詞「石走る」である。

ハシルは、元来、さまざまの方向に勢いよく動く意で、したがって、「石走る」は「石ニハシル」の謂いで、岩石に水がぶつかって勢いよく飛び散るさまを表わすことばであったと考えられる（井手至「萬葉語イハバシル・ハシリキ・ハシリデ」萬葉三二号）。この語を「淡海の国」に冠したことについては、「溢水」の意にとりなしてつづけたとも（古義）、「合水」の意にとりなしてつづけたとも言う（柿本人麿評釈篇上）。また、アフミはアハウミの約で、ア列音と乙類オ列音の交替を考慮すればアハウミはオハウミに同じく、アフミの国は「大海」の国と意識された可能性があると、岩に激する大海の意で「石走る」が「淡海の国」に冠せられたとする説もある（井手至「語源研究のため」言語七卷一号）。本稿は、「石走る」の語義の点と論理の整合という点から、第三の説にもっとも心をひかれる。だが、当面は、「石走る」が岩に水が激して飛び散る意で、淡海の国の湖水のさまを印象づける枕詞であることを確認すれば足りる。

「石走る淡海の国」という表現は、人麻呂をもって嚆矢とするもので、人麻呂の創案である可能性が大きい。^{注4}ところが、人麻呂以前に、「淡海」にかかわる枕詞がなかったわけではない。確実なものとしては、「鯨魚取り」と「には

鳥の」である。

鯨魚取り淡海の海を 沖放けて漕ぎ来る船 辺付きて漕ぎ来る船 沖つ櫂いたくな撥ねそ 辺つ櫂いたくな撥ね

そ 若草の夫の思ふ鳥立つ (巻二―一五三)

いざ我君振熊が痛手負はずはにほ鳥の淡海の海に潜させなわ (仲哀記歌謡三九)

これらは、被枕が「淡海の海」であり、当面の「淡海の国」とは相違する。この相違がこれらの枕詞を選ばせなかったという可能性も考慮される。しかし、「鯨魚取り」も「にほ鳥の」も「石走る」と同様に湖水に着目したもので、その点、「鯨魚取り―淡海の国」あるいは「にほ鳥の―淡海の国」という表現も不可能でなかったとも考えられる。とくに、一五三番歌は、近江荒都歌の詠出にあたって参看された形跡があり(伊藤博「人麻呂の歌学」『萬葉集の表現と方法』下)、人麻呂は確実に目にしていたはずである。にもかかわらず、「石走る」が用いられたのは、これら先行の枕詞をさしおいた選択の結果であったと見なければなるまい。

元来、「鯨魚取り」は生きのよい大魚を取る意で、「海利」(萬葉集檜の杣)をとりあげてほめる枕詞である。また、「にほ鳥の」は、湖水の代表的景物をもちだし、花や鳥を国見にかかわる呪物とする伝統(井手至「花鳥歌の源流」『萬葉集研究』第二集)をふまえて土地の繁栄を予祝する枕詞である。これらにおいて、「石走る」を選んで「淡海の国」に冠したのは、流動する「水」の相において淡海の国を提示するところに、人麻呂の意図があったことを明かすものにほかならない。「淡海の国の楽浪の天津の宮」は、何よりもまず「水」の都として位置づけられている。

見られるとおり、近江荒都歌において、「大和」は歴代帝都の地として、「淡海の国の楽浪の天津の宮」は天智天皇遷都の地として対置されている。そのそれぞれについて、かたや「山」をとりたてる表現を編み出し、かたや「水」をとりたてる表現を作り出しているということになれば、二つの枕詞「そらにみつ」「石走る」の独創が無縁のもの

だと考えることはできない。二つの独創を果たした意図は、一にかかって、対置される大和と淡海を“山”と“水”によって映発させることにあったと読みとってよいであろう。

近江荒都歌は、大和が歴代帝都の地であったことをうたっては冒頭「玉たすき畝傍の山」をもちだし、長歌をおさめて大津の宮の荒廃を嘆く反歌においては「志賀の唐崎」と「志賀の大わだ」とをもちだしている。「畝傍の山」は初代天皇神武の宮にゆかりの山であり、「志賀の唐崎」と「志賀の大わだ」とは天智天皇大津の宮にゆかりの水辺であり、もちだされて自然といえは自然である。しかしながら、「大和」と「淡海の国の楽浪の大津の宮」とが“山”と“水”とで対照されているとすれば、一方に山が、一方に水辺がもちだされたことを、偶然として見過ごすことはできない。二つの皇都の地を“山”と“水”とによって表徴せしめようとする意図が人麻呂にあったからこそ、大和にあっては初代の宮にゆかりの山をもちだし、淡海にあっては大津の宮にゆかりの水辺がもちだされたのにちがいない。その意図がもっとも顕著にたち現われたのが、「そらにみつ」と「石走る」の、二つの枕詞の独創であった。

三、山水対照の構造

前節において、「そらにみつ」「石走る」二つの枕詞の独創を、本質的には、大和と淡海を“山”の地と“水”の地として対照させる意図の顕現として把握できることを見通した。この二つの枕詞は、根幹において、それぞれ“山”と“水”とを通して大和と淡海とを讃美するはたらきをもつ。満ツとは、「神代かむよより生れあ継ぎ来れば 人さには国には満ちて」(巻四―四八五)「盈ち盛りたる秋の香のよさ」(巻十一―二三三三)のように靈力の充実をいうことばであり、走ルも「毎年としのはに鮎し走らば」(巻十九―四一五八)「落ちたぎつ走り、井水の清くあれば」(巻七―一二二七)のように生命力

の躍動をいうことばであることが、端的にそれを示している。その点、これらは、枕詞本来のありかたを継承したものと云ってよい。

ところが、「そらにみつ大和」と「石走る淡海の国の楽浪の天津の宮」とが、一首のなかでどのような文脈において布置されているかというに、かならずしも、土地に対する讃嘆とのみ言ってはすまじきれない問題をはらんでいることを否定できない。

まず、「そらにみつ」については、「大和」を賞讃する枕詞と言つてまちがいはなさそうである。直前の「つがのき櫛木のいや継ぎ継ぎに 天の下知らしめししを」の句が、とくに逆接の「を」のはたらきによって「そらにみつ大和」が「置くことこのゆるされぬ恒久の帝都であることをにおわせ、「そらにみつ」の土地ばめを浮きたたせる役割りをしてい

と解されるからである。^{注5}

一方、「石走る」は、上に接して「いかさまに思ほしめせか」と「あまざかる夷ひなにはあれど」との二つの挿入句があることとて、複雑な陰翳を帯びている。直前の「あまざかる夷にはあれど」は、「天津の宮に」の下の「天の下知らしめしけむ」と連動して、淡海の国大津が僻遠の地であるにもかかわらず皇都に選ばれたのにはそれなりのいわれがあったことをにおわせ、「石走る」の讃辞としての機能に対応している。ところが、この文脈をすっぱりとおおいこむかたちで、「いかさまに思ほしめせか」と遷都をいぶかる句が存在する。この句の存在によって、淡海の国大津の宮は、賞讃すべき土地であると同時に、皇都に選んではならぬ土地であることが暗示されることになる。その点、すでに説かれるとおり、「いかさまに思ほしめせか」と「あまざかる夷にはあれど」とは、文脈の上で背反関係に立っている（伊藤博「近江荒都歌の文学史的意義」『萬葉集の歌人と作品』上）。

「いかさまに思ほしめせか」について、つとに契沖は「所ヲ移シテ、天ニミツヤマトノ上ニ置テ見ルベシ」と発言

し（代匠記）、以後、多くの諸注が襲用するところとなった。この発言は、右の背反関係を直感し解消しようとしたものであったかと付度される。だが、この句を「そらにみつ大和を置きて」の上に移してみたところで、捨てられた「そらにみつ大和」を「置」くべからざるところとして強調し、かつ、淡海への遷都にそれなりのいわれを認めつつもいぶかるという文脈は、やはり矛盾をかかえている点においてかわらない。「いかさまに思ほしめせか」と「あまざかる夷にはあれど」と二つの句が隣接することによって背反関係をするべく露呈するすがたこそ、あからさまであるだけにかえって、人麻呂が意図し腐心したものであったと考えなければなるまい。

この背反関係に関して、伊藤博氏は、「いかさまに思ほしめせか」が敬仰思慕を根柢とする挽歌特有のくどき文句であることをふまえた上で、「失われたものを求める心と失わせた人を恨む心との複雑な錯綜がこの屈折した文脈を招いたのであろう。論理の矛盾はかえって詩の言語としての高い響きを表わしている」と説いている（萬葉集全注一）。文脈の裏がわに詩人の心を読みとろうとした発言で、注目される。しかし、本稿の見るところ、近江荒都歌は、文脈の屈折をあらわにする一方、その屈折をおさめて皇都の荒廢を嘆く構造が仕組まれているというべく、呈示された矛盾が作品のなかで融解し完結するかたちで、高い詩的綜合を実現しているのではないかと思われる。

結論をさきに言えば、背反関係をおさめてたつのは、独創の枕詞「石走る」のはたらきにほかならない。

さきにふれたとおり、「石走る」は、土地ほめであるという点で「あまざかる夷にはあれど」に対応している。ところが、その一方において、「石走る淡海の国の楽浪の天津の宮」は、「そらにみつ大和」の「山」に對置されることよって、「水」にふちどられた土地として映発させられていることを看過してはならない。けだし、人麻呂は、この対照によつて、「山」には不動常住を、「水」には流転無常を託したのではなかったか。讚美するべき土地でありつつも、一方において暗に、選べば必滅の宿命からまぬがれることのできぬ土地として「淡海の国の楽浪の天津の宮」

を提示したものとすれば、「いかさまに思ほしめせか」のいぶかりに、反面において対応する。この推測にとって、反歌のありかたは示唆的である。

楽浪の志賀の唐崎きざき幸くあれど大宮人の船待ちかねつ (三〇)

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にもまたも逢はめやも (三一)

反歌に水辺の土地がもちだされていることが、長歌で大津の宮が「水」の地として提示されていることとかわることは、さきにふれた。この反歌について、二首は、近江朝天智天皇挽歌群のうち、

かくあらむとかねて知りせば大御船泊はてし泊とまりに標結しめはましを額田王額田王 (卷二十一 五一)

やすみしし我ご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀の唐崎唐崎 舍人舍人 吉年吉年 (二五二)

を直接ふまえたものであるらしいことが指摘されている(前掲伊藤博「人麻呂の歌学」)。一五一番歌は「崩御が港から侵入した悪霊によるものと見て嘆いた歌」、一五二番歌はそれをうけて「港は天皇の愛された唐崎である」と見、唐崎はそれとも知らずにいることを嘆いた歌」と読むことができ(新潮日本古典集成萬葉集一)、天智天皇ゆかりの土地をもちだして、死の運命から逃がれることができなかつた天皇を哀惜している。崩御をもたらした「港から侵入した悪霊」は、「水」の精、無常の権化ともとりなせる面をもっている。人麻呂が近江荒都歌を詠出するにあたって天智挽歌群に着目しそれを反歌でふまえたのは、いたまれているのが荒都の主天智天皇であることとともに、ゆかりの地と対比させつつ天智をいたむ挽歌二首の発想が、水辺の地であることとて当面の長歌によく合致することを認識したからにはかなるまい。

あるいは、経緯は逆で、そのような天智挽歌に着目したことが、「水」に寄せて荒都をいたむ発想を長歌にもたらし、見るとおりの反歌となって結実したのかもしれない。どちらが実情に近いのか、にわかに決めかねるけれども、

いずれにしても、反歌のありかたは、「水」の地であったがゆえに宮が滅び去ったのだとする発想が長歌にこめられていてしかるべきであることを窺わせる面をもつ。

山水を対照させ格別の効果をねらった人麻呂歌として、ほかに、吉野讚歌（巻一―三六〇七、三八〇九）、人麻呂歌集常体の二首（巻七―二六八〇九）などをあげることができる。吉野讚歌は、吉野が山水具有の「山川の清き河内」であることを讃え、後代の吉野讚歌の典型を確立した作と見られる。一方、歌集常体の二首、

子らが手を巻向山は常にあれど過ぎにし人に行きまかめやも（二二六八）

巻向の山辺響みて行く水の水沫のごとし世の人吾等は（二二六九）

は、巻向の山と水とを対照させ、「山」に常住を「水」に無常を託して妻の死と人間のはかなさを嘆いている（新潮日本古典集成）。「山」と「水」は、具有のときはともに土地の讚美にかかわり、対置されるときは常住と無常という相反する属性を表徴するという認識が人麻呂にあったことを示して、注目に値する。

萬葉集卷三は、「柿本朝臣人麻呂、近江の国より上り来る時に宇治の河辺に至りて作る歌」という題詞のもとに、つぎの作を伝えている。

ものふの八十字治川の網代木にいさよふ波の去くへ知らずも（二二六四）

古来、この歌を、近江荒都歌が作られた旅の帰途の作とする見解がある（萬葉集檜手ほか）。卷三の配列がおおむね年次を追うらしい点を考慮すると、この歌の前に、持統十（六九六）年に没した高市皇子の宮の荒廢をうたうと推測される作（二五七〇二六〇）があり、近江荒都歌と同時の旅における詠作とするのには疑問があるけれども、題詞と歌とを考え合わせるならば、二六四番歌が近江朝廷の廢亡を悲しむ心をこめてうたわれたものであることは、ほぼたしかであろう。瞬時は網代木にいさよいながらやがて流れ去る「波」に感じ、こうした「水」の定めに寄せて、廢墟によつ

てかきたてられた無常の嘆きをうたう作が人麻呂にあることも、本稿にとって加えるところがある。

いったい、讚美するべきものが反面においてもものを衰亡にみちびく魔性をも示すことがあるとする思考は、萬葉人にとって由来のふかいものであったらしい。「石長比売」と対比される「木花之佐久夜毗売」が天つ神の子孫に死の宿命をもたらしたと語る神話など、この思考の一つのあらわれと捉えることができる。

人麻呂は、その歌集の部立ての一つに「寄物陳思」を設け、「物」の背景に人間につながる意味を読みとり、それに寄せて「思い」を陳べる方法を自覚した歌人であった（伊藤博「寄物陳思と正述心緒の論」『萬葉集の表現と方法』上）。こうした詠法の源流は、右の古代的思考のほか古代歌謡にも見出だされるものの、詩の技法としてはじめて認識し拡充したのが人麻呂であったと考えられる。

「山」と「水」との対照を仕組み、「山」に囲まれた大和と「水」にふちどられた淡海の国大津の宮とを讃えつつ、一方では、「山」との映発によって「水」の皇都がその定めのままに荒廢に帰したことを哀惜するという技法を貫いたのが、近江荒都歌であった。^{注6}その点、山本健吉氏が、「いかさまに思ほしめせか」を挽歌特有のくどき文句と捉えた上で、大津の宮に「死者の住む幽界」としてのイメージを読みとったのは（人麻呂における詩の誕生）『柿本人麻呂』、その着想において正しかったと言える。近江荒都歌における山水対照の構造は、すこぶる巧妙であり高度であると評してよいであろう。

四、初案と推敲と

萬葉集は、近江荒都歌について、それが一度に詠作されたものではなく、さきだって作られた初案（第一次案）があったらしい形跡をとどめている。本文に注された異伝をたどることによって復原できる長反歌がそれである（松田好

夫「人麻呂作品の形成」『萬葉研究新見と実証』・曾倉岑「萬葉集卷一・卷二における人麻呂歌の異伝」国語と国文学四〇卷八号ほか。長歌では異伝を「或云」のかたちで注し、反歌第二首では「二云」のかたちで注しており、体裁に相違がある。これは、第二反歌の異伝が近江荒都歌とは本来別個に、異伝の歌詞によれば比良の地で作られたことを示しており、もともと反歌が一首であった荒都歌に推敲を加える際に手を加えて反歌としてとりこんだ、という事情に由来すると説く見解が提出されている（神野志隆光「近江荒都歌成立の一問題」日本文学二五卷一二号）。ありうることである。この見解に一往したがって第一次案を示せば、つぎのとおりである（本文系統と相違する部分に傍線を施す）。

玉たすき畝傍の山の 檀原のひじりの宮ゆ 生れましし神のことごと 樛木のいや継ぎ継ぎに 天の下知らし
めしける そらみつ大和を置き 青丹よし奈良山越えて いかさまに思ほしけめか あまざかる夷にはあれど
石走る淡海の国の 楽浪の天津の宮に 天の下知らしめしけむ 天皇の神の命の 大宮はこと聞けども 大殿
はここと言へども 霞たつ春日か霧れる 夏草か繁くなりぬる ももしきの大宮ところ 見ればさぶしも

反歌

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

作品の構造の上で、右の異伝系統が本文系統ともっとも大きな相違を示す点の一つは、「天の下知らしめしける」の部分である。これによれば、冒頭からここまでの十句は、連体修飾句として「そらみつ大和」にかかわることになる。

この点に応じて、見逃がすことのできないことが二つある。一つは、長歌第四句が「ひじりの宮ゆ」となっていることである。畝傍山のふもと檀原の聖帝の皇居、よりこのかた云々と土地に主眼をおいたこの表現は、これを含む冒頭

十句が歴代帝都のいとなまれた土地「そらみつ大和」の連体修飾句であることに、よく対応していることがで
きる。^{注7} もう一つは、傍線部Cにおいて、「大和」の枕詞が「そらみつ（原文「虚見」）」となっていることである。「そ
らみつ」は、第二節でふれたとおり、当時、皇室始祖の降臨神話にかかわる枕詞と意識されていた可能性が高い。と
すれば、「人皇第一代の皇居以来歴代の帝都であった大和」という文脈に、その始祖の当地に対する予祝のこもる枕
詞「そらみつ」が布置されてあるのは、これまたよく対応したものであることができる。これらの対応は、異伝がか
りそめの所産ではなく、一貫する配慮のもとに生み出されたものであるらしいことを想像させる。

対応ということについては、さらに、つぎの諸点を加えることができよう。「いかさまに思ほしけめか」と、それ
をうける「天の下知らしめしけむ」とが、時の関係において対応する（萬葉集注釈）。また、「霞たつ春日か霧れる^f 夏^g
草か繁くなりぬる」という、宮の荒廃にとまどい、疑いつつ現状をのべる表現が、長歌の結び「見ればさぶしも」と
対応する（岩下武彦「近江荒都歌論」日本文学二七卷二号）。「さぶし」とは、変化にとまどい、もとの状態に対する執着
をあらわにすることばだからである。傍線部f・gで「春日」と「夏草」がもちだされたのは、「此宮の見えぬを、
いかなることぞと思ひまどひながら、をさなくいふなれば、時をも違へておもふこそ中くあはれなれ」（萬葉考）
と見ることもでき、この点も右の文脈によく対応するものといえよう（傍線部dも異伝系統の文脈に対応する面をもつこと
は、後文および注5参照）。

このように、異伝系統は異伝系統でそれなりに神経をゆきとどかせ、たいへんよく出来ている。このことは、とり
もなおさず、異伝が時を移し人を変えて伝誦の末に生み出されたものではなく、詩の方法を知る詩人によって構成さ
れたものであるうことを語り告げる。

異伝の構成といえは、長歌と反歌のあいだにも、意識的な対応があるらしいことが読みとれる。まず、長歌は、前

段で橿原の聖帝の宮以来の宮とて大和を提示し、後段において、そこを捨てて淡海の国大津の宮で天下を統治した天智天皇の、廢墟となった大宮ところを慨嘆するというかたちをとっている。それに応じて、大和と淡海とにおける統治者「生まれましし神のことごと」と「天皇の神の命」とをもちだしている。ところが、それぞれの統治者は、「そらみつ大和」と淡海の「大宮・大殿」とに対する連体修飾句の一部であり、けっきょく土地に収束させられるかたちをとっている。したがって、長歌は、ぜんたいに土地に即く歌という性質がつよい。この長歌にあわされた反歌が、「楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」の一首であった可能性があることは、さきにふれた。この一首の反歌は、視線を大津の宮ゆかりの唐崎に転じている点に長歌からの展開を見とることができけれども、土地に興味をそそぎ、「大宮人」をもちだしながらも土地の景物である「船」に焦点をあててうたう点、長歌のありかたに対応するものといえよう。ちなみに、第二反歌(三二)は、異伝・本文ともに「昔の人」に焦点をおき、姿勢を異にする面がある。この意味において、異伝系長歌に対応する反歌は第一首のみであるというべく、異伝系統では反歌が一首であったとする見解は、文脈の検算によっても支持される。

以上、異伝系統は、長歌自体においても、また長歌と反歌のありかたにおいても、一貫する作品と読むことができ。作りなした主体として、人麻呂以外を想定しうる余地は乏しいであろう。

ところが、一貫しつつも、異伝系統には、表現上のすき間が、すくなくとも一つある。

異伝系統においても、「いかさまに思ほしけめか」と「あまざかる夷にはあれど」とが接続して「石走る淡海の国の楽浪の大津の宮に 天の下知らしめしけむ」の直前に置かれており、本文系統についてふれたのと同じ矛盾をはらんでいる。この矛盾の叙述があるからには、異伝系統においても、淡海の国大津の宮が讚美するべき面と遷都をしてはならぬ地であることをに合わせる面をもつことを「石走る」にこめたつもりではあったろう。本文系統でこの矛

盾を昇華させるものは、「石走る」の、本来の讃辞としての機能と、「そらにみつ」との対照の結果生じる、大津の宮の無常を暗示する機能とであった。だが、異伝系統では、大和は歴代の帝都として提示されているばかりで、「そらみつ大和」には、「石走る」を映発し矛盾をうけとめさせるだけの力がない。矛盾は矛盾として残り、「石走る」の独創は、生かされていない。この欠陥をおおうことは、むつかしいであろう。

異伝系統のこのすき間に気づき、可能なかぎり構成を緊密なものにしようとする結果が、本文系統であった。したがって、推敲の手がもつとも大きく加えられたのは、「いかさまに思ほしけめか」と「あまざる夷にはあれど」との背反関係をうけとめうる構造を実現することにあつたはずである。人麻呂は、まず、「そらみつ」を「そらみつ」とあらためて大和が「山」に護られた恒久の地であることをにおわせ、「石走る」との対比をうちだすことによつて、見たとおりの巧妙な文脈を仕組んだものと察せられる。

ところが、長歌冒頭以下「天の下知らしめしける」にいたる十句をこのまま連体修飾句としておくと、せっかく「そらにみつ」に工夫をこらしても、依然、歴代の帝都であるがゆえに置くべからざる土地として大和を提示したと見られる面が残る。連体修飾の機能を捨て、しかも、下文との照応に効果をもたせるかたちとなれば、こころみるまでもなく、逆接をおいてほかにない。「天の下知らしめししを」が選ばれたゆえんであるう。

こうして選びとられた詞句「天の下知らしめししを」は、直後の「そらにみつ」の讃辞としてはたらきを高めつつ（既述）、かつ、下の「いかさまに思ほしけめか」ともよく照応する。よく照応し、「いかさまに思ほしけめか」のいぶかりを浮かび上がらせる。ということは、結果として「あまざる夷にはあれど」との背反もいっそう顕著に押し立てられることになり、受け手が「石走る」のはたらきに思い至れば、一首の仕組みが一挙に得心されるように準備されたことになる。

かくて、「石走る淡海の国の楽浪の天津の宮」が荒廢に歸するべき宿命にあったことが一首のなかに定位され、「いかさまに思ほしけめか」と「あまざる夷にはあれど」との背反をうけておさめる構造が、最小限度、実現された。ということは、荒都は、ここにおいてはじめて客観視され、哀惜の対象として十分の形象を与えられたということである。長歌のむすびが「見ればさぶしも」より「見れば悲しも」に改められ、一種諦観をもって対象をいたむ姿勢があらわにされたのも、このことにかかわって理解するべきであろう。

「見れば悲しも」への推敲と、その上の「霞たつ春日か霧れる 夏草か繁くなりぬる」を「春草の茂く生ひたる霞たつ春日の霧れる」へと改めたことがふかくかわることについては、岩下武彦氏の説くとおりでであろう（前掲「近江荒都歌論」）。眼のあたりした荒廢を詩の形象の内面に十分とりこむことができなままに、疑い口ごもる語気でうたったのが初案であった。荒都が哀惜の対象として形象化されおおせたとき、この語気はぬぐい去られるはずで、事実、推敲によってぬぐい去られ、春草と春霞とが宮跡をおおう現実を直視する表現に改められている。

初案によれば、人麻呂が近江荒都にたち寄ったのは、晩春のころであつたらしい。霞がたち、たけたかく生長した草の季節であつた。「霞たつ春日か霧れる 夏草か繁くなりぬる」は、この实景に依じて詠まれたと考えられる。ところが、推敲の結果、季節は、「春草」「春日」と、いつばかりの春と限定されなかつたかたちに改められた。これは、捨象であり、一種の虚構である。思うに、推敲によって荒都を客観する視座を確保した結果、荒廢とはもつともするどく対立する萬物生動の「春」が歌の季節に選ばれ、哀惜をいっそうきわだたせる技法が貫かれたのではなかつたか。ことは、季節の不統一をぬぐうだけの目的ではなかつたはずである。

ひとつことばが動かされると、その波紋は、一首のいたるところに及ばずにはいない。「天の下知らしめしける」が「天の下知らしめししを」に改められ、大和に対する連体修飾の機能を捨て相對的に独立的傾向をつよめたため

に、「生れましし神のことごと」がその主体としてせりあがり、「樛木のいや継ぎ継ぎに」と相俟って冒頭十句が時間の叙述に傾いた。これに応じて、「宮ゆ」が「御世ゆ」に改められたのであろう。一方、冒頭十句の末尾を「天の下知らしめししを」とすると、十句の独立性がつよまると同時に、知らしめしめたのがどこにおいてであるのかが、そのぶん不明確になるうらみが生じる（萬葉考ほか）。「天の下知らしめししを」で小休止をおきながらも呼吸をつづけて「そらにみつ大和を置きて」まで言いついで大きく息を休めるかたちにしたのは、この点に対する配慮であろう。

この文脈の変化は、後段の「天皇の神の命」の様相にも影響を与えないではおかない。異伝も本文も、部分として見れば「天皇の神の命」が「大宮・大殿」の連体修飾成分であることにかわりはないものの、本文においては、「生れましし神のことごと」が浮きたったぶんだけ、対置された「天皇の神の命」も文脈の前面にせりあがってくる感がある。「いかさまに思ほしけめか」から「いかさまに思ほしめせか」へと、いわば主体を傍観する表現からあたかも眼前の天智にいぶかりを向けたかのような表現に改められたのも、これに対応しての措置であろう。

こうして、長歌は、より土地に即く異伝系統から、土地に即きながらその土地に息づいた人間（歴代天皇と天智天皇）をも浮かびあがらせた本文系統へと、相貌をあらためることになった。このときに旧作の短歌（三一異伝系統）を転用して反歌がもう一首加えられたことも、この長歌の変貌に関連して把握できると思う。加えられた一首「楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」が、当初の一首（二〇）と同工でありつつ、「昔の人」に興味をいっそうつよく注ぐ作だからである。反歌一首から反歌二首への変化も、長歌の推敲と方向を一つにしたものであったといつてよからう。

初案から第二次案へ、いとなみは複雑な試行を重ねたはずである。だが、その推敲のあとを文脈を追い論理をたどって復原すれば、基本的には、以上のようになると思う。推敲の焦点が、「いかさまに思ほしけめか」と「あまざか

る夷にはあれど」との背反に心をひそめ、背反を昇華させるべく「そらにみつ」「石走る」二つの独創的枕詞によって一首に「山」と「水」の対照を実現するところにあつたことだけは、最小限度、たしかであろう。巧妙かつ高度な技法が、一瞬にして獲得されたのではないことを示して、異伝の存在は貴重である。

五、宮廷歌人人麻呂

以上、近江荒都歌が、山水対照の構造を布置することによって詩的綜合を達成したと見られること、および、その達成が推敲の末に果たされたものであつたらしいことを論じてきた。

萬葉人は、旅において、ある所を通過するにあつてそこでのある物を見て鎮魂の歌をうたう、いわば羈旅信仰ともいふべき習俗を伝えていた。近江荒都を過ぎるときに大宮ところを見て悲しんだ当面の歌がこの習俗の所産であることはほぼ確実で、晴れの歌体である長歌形式にその悲傷を託したのは、おそらく、官命を帯びて旅する宮廷集團を代表して人麻呂がうたつたことを示している（前掲伊藤博「近江荒都歌の文学史的意義」）。第四節の考察によって、異伝系統は、土地に即く面がつよいことが知られた。羈旅信仰をうけ、現地で鎮魂をはたすべく手向けられたのは、ただし、この異伝系統であつたと考えられる。

ところが、人麻呂は、ふたたび詠出の機会を得た。推敲の結果、一首は、土地に即く度合いをゆるめ、山水の対照による巧妙な構成が完結されることになった。詩想が定位され、技法が最大限に駆使されたのは、時をうつしての推敲であつたからにちがひなく、かつ、より高度な享受者を念頭においたからにほかなるまい。

より高度な披露の場といえ、基本的には、帰京後、召されて宮廷に参上した際というのが、もっとも想定しやすい。人麻呂歌が持統天皇の治世に集中して詠作されていることを重視すれば（橋本達雄「萬葉宮廷歌人の研究」）、その場

が持統天皇によって主宰され、天皇臨席の晴れの間であったことも、また想定しやすい。近江荒都の主天智天皇は、持統にとっては父にあたる。荒都にあつい悲傷を手向ける作の受け手として持統はまっさきに指折られたはずで、また、歌心ふかい持統のこととて（巻一―一八など）、見たとおりの詩的達成は、十分に効を奏してうけいれられたはずである。これを逆に言えば、持統を中心とする場での披露を予想するがゆえに、荒都歌は推敲され、詩的綜合を果たしたということである。

伊藤博氏は、近江荒都歌の文学史的意義を数えて、羈旅信仰によりながら文芸の世界を樹立したこと、文学史上もっとも巨大な歌人人麻呂の宮廷歌人としての定着を示すのがこの作であること、などをあげている（前掲論文）。肯綮にあたる見解だと思ふ。

文学史的意義を標榜する荒都歌の昇華は、推敲により、生みの苦しみを経ることによって、果たされた。その推敲を駆りたてた根源の動機は、人麻呂が宮廷に披露の場をもつ、いわゆる宮廷歌人であったという点に存する。宮廷歌人という方法概念による規定が、作品の技法をたどる表現論、ひいては作品を通してする文学史論に有効に切りむすぶことを語り告げる、もっとも初期の人麻呂作品だという意味において、近江荒都歌の重要性ははかりしれない。

注

1 原文「石走」をイハバシノと訓み、イハバシ（石橋）ノ間アハヒと言いかけて「淡海」アツミに冠したとする説がある（冠辭考）。しかし、この歌を見るに、ノの訓添えは、「天下」あめノしたのように漢語の字面をそのまま用いたばあい、および「淡海国」あふみくに「大津宮」おほつのみやのように慣用的表記によったばあいに限られており、「石走」をイハバシノと訓みうる可能性は、ほとんどない。よって、本稿では、通説にしたがい、イハバシルと訓んで考察を進める。

2 原文「霞立」を萬葉集攷証はカスミタチと訓み、「枕詞にあらず。(略)霞立はきれるといふへ、かゝる詞なれば、霞たちとよまでは解をなさず」としており、継承者も多い。だが、それだと、下の「霧れる」と重複する感があり(萬葉集注釈)、説明的にすぎるので(萬葉集全注一)、カスミタツと訓み「春日」の枕詞とする旧訓にしたがう。

3 「よそに見る」という表現について、よそ(遠く)から見るといふ訳が与えられるばあいがある。ちなみに日本古典文学全集本と新潮日本古典集成本がともにそう訳している例をあげれば、卷十一―二七四四、卷十二―三〇〇一、三〇三三、三〇九七、卷十五―三六二七などで、たしかにその訳があてはまるものが多い。だが、この表現の本義は、無縁なものとして見るの意であり、意をとって訳せば「よそ(遠く)から見るとも言えるということであろう。かりに「よそに見る」がそれ自体「よそから見る」の意と意識されたばあいがあつたとしても、その用例はおよそ第三期以後にあらわれており、第二期以前の例は、いずれも本義どおりと見て狂いはない(卷十一―七四、卷三―四三三など)。したがって、このばあいにも、当面「そらにみつ」を大空より見たの意に解しうる可能性は認めにくい。

4 人麻呂には、「石走る」の用例がもう一つある。「青角髪依網の原に人も逢はぬかも 石走る淡海^{あがた}島の物語りせむ」(卷七―二八七、歌集詩体)である。「依網の原」の所在や「淡海島の物語り」の内実が明らかでなく、また、近江荒都歌との先後も不明である。もし、この歌が荒都歌より先に作られたものであれば、「石走る淡海^{あがた}の国」の表現は、荒都歌においての独創ではないことになる。ただし、そのばあいにも、淡海にかかわるいくつかの枕詞のなかで、荒都歌が「石走る」を選択したのはなぜなのか、その意図を追究する必要は、依然として減殺されるものではない。

5 「天の下知らしめししを」の下に休止があるとする一般の解には、疑問がある。異伝系統(人麻呂自身の初案であることは後述)に「そらみつ大和を置き 青丹よし奈良山越えて」とあるのに対比すれば、本文系統では「大和を置きて」の下に呼吸の切れめがあると思ふべきで、「知らしめししを」と「そらにみつ大和を置きて」とは、逆接の呼吸をおきながらも連続すると見るべきかと思ふ(このこと、第四節でもふれる)。「大和を置きて」の下の「青丹よし」が奈良山(または奈良)に格別の愛着をこめる際の表現で(昭和五十八年十月三日、橋本四郎氏直話)、その提示は、一首の冒頭(卷一―八〇、卷十三―三三七ほか)もしくは休止のあと(卷一―一七、卷十三―三三三六など)においてなされることが多い(用例の四分の三以上)。こうした傾向からも、右の可能性が考慮される。

6 さきにふれた二六四番歌について、孔子川上の嘆（論語子罕第九）をふまえたものとする見解がある（代匠記）。そのとおりだとすると、おなじ論語に、山水を対比し、それぞれを仁者と智者に配した章があることが想起される。「子曰、智者楽水、仁者乐山、智者動、仁者静、智者楽、仁者寿」（雍也第六）である。この章が「山」を「安固自然、不_レ動而萬物生」とし、「水」を「流而不_レ知_レ已」として提示する点（集解）、応用すれば、「山」に常住を、「水」に無常を託する当面の発想を導く面をもつとも考えられ、古代的思考の面にあわせて興味をひかれる。また、後の『播磨国風土記』は、袁奚皇子（顯宗天皇）の詠辞として「淡海は水_ナ淳る国 大和は青垣 青垣の大和にいまし 市辺の天皇の御足末 奴僕らま」という詞章を伝えている（美囊郡）。この詠辞において、冒頭「淡海は水_ナ淳る国」は、青垣山に囲まれた大和と対比され、「大和は青垣」以下をひきたてる序詞的な役目を果たしていると見られる（木本通房『上代歌謡詳解』）。持統朝の人麻呂らがこの詞章を知っていたかどうか、定かではないけれども、「大和」と「淡海」とを「山」と「水」によって対照させる発想が、提示されれば自然に受け容れられるものであることを示して、当面、参考になる。かりに、何らかのたずきにより人麻呂がこの詠辞を知っていたとすると、「水_ナ淳る国」に対して「石走る淡海の国」と「水」の流動をうちだしたことになる。本稿にとっては、より都合がよい。だが、そこまで言えば、憶測が過ぎよう。

7 岩下武彦氏は、「宮」を治世（御世）を意味する語で、当時すでに古い言いかたとなっていたとする観点から、異伝と本文との関係を考察している（『近江京都歌異伝考』国文学研究資料館紀要三号）。興味ぶかいが、本稿は、文脈を重視する立場にたつて、「宮」は「大和」に対応し、大和を帝都の地たらしめた初代の皇居が言及されたものと見て考察を進める。

8 異伝「霞たつ春日か霧れる 夏草か繁くなりぬる」と本文「春草の茂く生ひたる 霞たつ春日の霧れる」とでは、春日をうたう二句と草の繁茂をうたう二句の順序が逆になっている。これは、直前の「大宮はことと聞けども 大殿はことと言へども」が「大宮」（大）より「大殿」（細）へと焦点を絞り（金子元臣『萬葉集評釈』）、直後の「もしもきの大宮とこ 見れば悲しも（さぶしも）」がふたたび「大宮とこ」全体に焦点を拡げていることに関連して理解するべきものかと思う。すなわち、異伝系統では、「大宮」から「大殿」へ焦点を絞ったのに並行して「春日」から「夏草」へ、これも大より細へと叙述を対応させたのに対して、本文系統では、「大宮」から「大殿」へ焦点を絞ったのをうけてまず細部の「春草」を言い、ついで視界を拡げて「春日」のさまをうたつて、結びにおける「大宮とこ」の焦点の拡大にすべりこむように仕組んだものである。大から細へ、細から大へという本文系統の焦点の移行はきわめて自然で、長歌をむすぶ「もしもきの大宮とこ 見れば悲しも」の焦点の拡大

は、つづく反歌において故宮ゆかりの水辺をもちだしての抒情へと展開し、茫洋と余韻をひいて荒都への悲傷をうたいおさめている。異伝系統から本文系統へ、ここにも構想の定着を読みとることができる。

9 異伝系統が現地での詠、本文系統が帰京後の詠であることについては、はやく伊藤博氏に指摘がある（前掲「近江荒都歌の文学史的意義」）。なお、旅中の詠作について、後代の芭蕉が「旅にては句も出がたきものにて候」云々（元禄元年十二月五日、其角宛書簡）と述べていることを、尾形竹氏の紹介によって知った（昭和五十六年十月六日、朝日新聞夕刊）。作品の形成と完結を追究する立場にとつて、すこぶる示唆に富む。

あとがき

本稿を草するにあたり、井手至先生をはじめ、本学上代研究会の方々より有益な教示を得ることができた。記して、謝意を表したい。